

主題表現法に基づく造形表現力と鑑賞及び評価能力育成に関する考察

——題材「季節感のある和菓子のデザイン～仙台市の四季～」を通して——

*立原慶一・**小野あけみ

Observations on fostering the ability to engage in artistic expression and art appreciation and evaluative abilities based on the thematic expression method
—— via the theme "Designing traditional confections with a seasonal flavor:
the four seasons in Sendai"

TACHIHARA Yoshikazu, ONO Akemi

Abstract

This paper studies the methodological hypothesis that if "our own works guided by thematic expression" are appreciated and evaluated by paper questionnaire, the abilities in question will be cultivated effectively. Ensuring conversance with all answers provided by pupils in response to the questionnaire, analysis is performed using two research methods: itemizing the evaluation content, and devising standard responses. The aim is to use these techniques to explore the level of ability and features of that ability exhibited and shaped by the material, and utilize the knowledge thus acquired of the current state of ability and any relevant issues to enrich and develop future educational practice.

Of the three types identified by dividing the content for evaluation by item, in particular need of consideration in terms of instruction for the purpose of fostering pupils' art appreciation and evaluation abilities are the ten percent of pupils belonging to number two, "the type that ended unfavorably, perhaps because the content for evaluation was not itemized." These pupils were unable to perceive any theme in the work, and their sensibilities are functioning insufficiently to sense the meaning and sentiment of the work.

Then, of the four types of ability identified by devising standard responses, demanding consideration with regard to instruction in thematic expression are the ten percent of pupils belonging to number three, "the type whose expression encompassed only an awareness of theme" and ten percent belonging to number four, "the type showing no awareness of the theme", a total of twenty percent of pupils. These pupils have not mastered thematic expression. The remaining eighty percent of pupils however succeeded in achieving self-innovation through this means of artistic expression, and tasting the joy of an experience akin to critiquing the status quo.

A methodological hypothesis was proposed and its validity investigated in a practical manner, and the educational significance of this material revealed to be great enough to warrant special mention.

* 美術教育講座

** 宮城教育大学附属中学校

Key words : traditional confection (和菓子)
methodological hypothesis (方法論的仮説)
our own works guided by thematic expression
(主題表現法に導かれた自分たちの作品)
itemizing the evaluation content (評価内容の項目別化法)
devising standard responses (回答内容の評定基準化法)
types of ability (能力別類型)

はじめに

本研究では、表現と鑑賞の相互スパイラル運動効果を目論むという、大枠としての方法論的仮説の有効性が実践的に検証される。その一環としての本稿は、「主題表現法に導かれた自分たちの作品」を質問紙法によって鑑賞及び評価するならば、当該能力が効果的に育成されるという、より具体的な形となる方法論的仮説を研究対象に据える。

その際、まず鑑賞及び評価能力と、主題表現力の程度並びに特質が如実に現れてくるような、質問項目を考案し設定する。次に、その質問紙に対する生徒の全回答内容と対話しながら、「評価内容の項目別化法」と「回答内容の評定基準化法」という、二つの研究方法で分析してみることにする。これらの手法で本題材において発揮、形成される能力的レベルと特徴を探ることによって本題材に対する評価指標を確認する。また、そこで得た能力の現状と課題をめぐり知見を、今後における教育実践の充実と、発展に生かそうと思う。

これまで鑑賞と評価の語がほぼ同じような意味で用いられてきたが、ここで能力上の違いを明確にするべく別々に定義される。鑑賞力とは、作品に織り込まれた美術的特質の意味を感受しうる能力、いわば作品を「見て意味や心情を感じる」力と考えられる。それは日本の図画工作科及び美術科学習指導要領で「感性」と定義され、とくに平成10年度版中学校美術科要領では教科目標の一つとして新たに掲げられていた。

評価力とはそれを前提としつつも客観的な立場に立ち、作品の意味や心情が、一体いかなる表現方法を根拠に直観として画面に実現されているのか、を洞察する理性的な力である。それはM.J. パーソンズ理論の「解釈」に相当する¹⁾。またどの程度効果的にそこに与えられているかの度合いを価値意識によって序列化する、理性的な能力の意味ともなる。それはパーソン

ズの「判断」に該当する²⁾。評価とは解釈と判断からなる概念なのである。

実践の手順として、小野あけみが考案した題材「季節感のある和菓子のデザイン～仙台の四季～」を附属中学校1年生、4クラス121名に対して制作させる。その後、自分たちの作品を鑑賞して感受し得た内容を記させる。とくに生徒が各自の価値意識を働かせて、美しく優れていると見なした作品を3点選ばせる。そこにおける表現方法的価値を追求させ、最終的にその根拠を述べさせる。続いて、和菓子制作とその鑑賞活動の授業全般で学んだことや、気づいたことを記述させる。

小論ではまず主題の感受体験と、それを裏付けるべき各種表現方法的価値に対する洞察の有無など、作品に対する生徒の鑑賞及び評価の実態はいかようなか、という視点から回答内容と対話する。それを通して評価項目の分節化を試みる。作品が生徒によってどのように評価されたのか。それら内容を分析して項目別化するのである。

続いて評定基準という観点から、和菓子の制作と鑑賞活動をめぐって生徒自身が学び且つ気づいたこととは一体何か、という質問に対する回答内容を検討する。その際、4～5個をめどに序列的に類型化を試みる。さらには回答内容を改めてその能力別類型に位置づけて、評定基準の妥当性を吟味する。次いで、各類型に収まった件数をカウントし、数値を相互に比較する。

これら二つの研究方法によって、本題材実践において形成された美術的能力レベルの人数分布が判明する。結果的には今回、本稿が具体的な形として提起する、題材論的仮説の有効性が検証される。第二に、本題材である「和菓子の制作と鑑賞活動」がそうした学的営為にとってどれくらい有意義であるのか、その特筆のレベルを客観的に測定してみたいと思う。

1. 本題材の特徴

本題材では和菓子の季節感、そのリアリティ感、地域性（仙台市）という主題意識を課題として生徒に表現させる。すなわち和菓子制作を題材とする主題表現法を試みさせる。その後、これら表現体験を踏まえて自分たち作品を鑑賞及び評価させ、当該能力の各レベルが本題材にあって、どのくらいの人数によって達成されるのか。能力別類型ごとの人数分布を調べることにする。

和菓子は主に豆や飴、寒天で作られているため、素材の可塑性や質感を生かして美しい形に仕上げられている。その繊細で穏やかな色合い、美しい色のグラデーション、配色の美しさ、質感の魅力、モチーフのもたらず季節感が私たちの目を引き、心をも捉えてやまない。和菓子のデザインには、自然の美しさや変化に気づく鋭い観察眼と豊かな感性、日本人の美意識が脈動している。日本人はこれまで四季折々の美しさや、人と自然の調和を大切にしてきたのである。

日本の四季を特徴づける諸事物は和菓子として表現されるとき、線や形、色など美しい造形要素のみを抽出するべく、具象性再現性から引き離され単純化や強調、時には象徴化がなされる。ここで生徒には美的感覚や美意識を働かせて、課題とされた主題意識を効果的に造形化するべく、表現方法をめぐって多様に構想させることができる。紛う方なき主題表現法が行われるのである。

今回の材料は豆や飴、寒天など実際の食材ではなく、主に樹脂粘土や紙粘土、カラー粘土などすべてその代用品である。それは第一に、考え付くと同時に手で形や色に表すことができること、第二に、試行錯誤しながら創意・工夫し多様に表現できること、第三に、手触りのよさを味わえることなど生徒にとって魅力的な素材である。とくに三原色のカラー粘土を混ぜ合わせて、自分の意図する形と色を追求することは、ダミー和菓子の季節感、そのリアリティ感さらに地域性（仙台市）という主題意識を、主体的に造形化する営みに他ならない。

2. 評価内容の項目別化法による鑑賞及び評価能力の測定

1) 「予想された範囲で評価内容の項目別化がなされた類型」

<質問事項1>「作品を見て、感じたことを書きましよう。和菓子『仙台の四季』の商品開発デザインとして、美しく、優れているものを3つ選び、選んだ理由についてできるだけ詳しく記述しなさい」

<質問事項2>「作品を選んだ時の、判断基準は何ですか？」

これらが記載された質問紙が「鑑賞カード」の名称で生徒に配られたが、それに対して彼らは一人三点を選出し、感受内容とそう感じた理由を表現方法的価値に求めるべく、理性を働かせた。すなわち専門用語を用いれば「解釈」活動が試みられた。「リアリティ感（和菓子として美味しそうに見える。そのため写実性から解放された単純な形、丸みを帯びた形、淡く渋い色味が追求される）」、「季節感」、「地域性（仙台市）」の三つは、本題材で制作の条件とされた主題意識である。

生徒は三点を選定したが、それらはいずれかの主題表現に成功し、作品から主題が感じ取れる、と評価された作品である。こうした鑑賞及び評価を行えた類型に属する生徒数は72名であり、後に述べる「予想された範囲を超えて評価内容の項目別化がなされた類型」に所属する、生徒35名と合わせれば総数107名にも上る。かくて指導のねらいは88.4%約9割の率で達成されたと見なしてよい。それは主題表現法に基づいて、生徒の鑑賞及び評価能力を効果的に育成できた事態に他ならない。本稿で研究対象とする方法論的仮説の有効性が、本題材において明確な形で検証されたことになる。

「予想された範囲内で評価内容の項目別化がなされた類型」の事例は以下の通りである。

「トンボが飛びかう情景をリアルに頭に思い浮かべることができます。それに色が秋らしい感じで良かったです。おいしそうです」——「季節感」「リアリティ感」の評価。

「秋の季節感がよく出ている。秋の色をたくさん作った作品です。本当においしそうで食べたくなります」——「季節感」「リアリティ感」の評価。

「冬の幻想的な風景をうまく作品に表していたと思います。またうさぎに仙台式さをプラスするため、伊達政宗の眼帯などを付け、とてもいい作品でした」——「季節感」「地域性（仙台市）」の評価。

2) 「評価内容の項目別化がなされなかったか、不首尾に終わった類型」

質問事項2に対する回答で遺憾にも記述のない者や、「かわいく、きれいな感じ」などズレた判断基準をあげる生徒がいた。彼らは授業の当初で教師から、明瞭な三つの主題意識を動機づけされたはずである。その他の事例としては、妥当と見なされる判断基準として「おいしそうなもの（リアリティ感と同義）」を設定しながら、作品選定の理由では季節感やリアリティ感、地域性（仙台市）という主題形成（主題表現に成功し作品から感じとられるべきものの謂い）に何ら触れることなく、以下のように的を外れた記述に留まる生徒もいた。

それは「柔らかそうだったから」「ユニークで面白かったから」「まんじゅうの新しい形だったので、これにしました」「中に包まれているウサギがかわいくきれい」「表現がよく色合いがいい」「色があざやかでよいと思った」等である。

彼らは直観として作品に与えられるべき、所定の主題形成を感受できないでいる。それは視覚だけで外観できるような性格のものではない。主題形成は感性によって直観的に感じ取られるべきものであり、あくまでも芸術的な形成を経たと見なされているのである。

そこでは前提としての感受体験がなされていないのだから、その後、表現方法的な根拠を理性の働きによって突き止める、評価行為としての解釈はもとよりあり得ない。この能力別類型に属する生徒は14名で、全体の11.6%約1割を占めた。これは指導のねらいが達成されなかった生徒の比率である。

3) 「予想された範囲を超えて評価内容の項目別化がなされた類型」

この能力別類型に属する生徒は35名で比率にして28.9%約3割であり、その存在は相当に高い鑑賞及び評価能力が本題材で発揮されたことを示唆している。想定された以上の実践成果がかくも明確な形で得られた事態は、これまで筆者が行ってきた絵画や彫刻、デ

ザイン、工芸の各題材で見られることがなかった。ダミー和菓子の制作と鑑賞活動では、それほど画期的な実践成果がもたらされたのである。本題材の教育的意義は相当に高いことが判明する。

以下に示す9つの評価項目は、生徒による回答文中で当該項目を特徴づけるのをあえて一つに絞って、その代表としたものである。そのため同一文には、他の項目においても評価されるべき内容をも含んでいる。その事情をここで断っておきたい。したがって観点の採り方の違いによっては、他の項目に組み入れられる場合も考えられるのである。

a. 「独自の技法のもたらす表現効果性」の評価

「折り紙でおった花や、ジェル（「ジェルキャンドル溶液」の略）を添えていたりする発想が良いと思いました。作品に切れ目がついているのが、和菓子らしさが出ていて良かったです。薄いジェルでつやを出しているのが、美味しそうな感じを引き立てていました」

「ジェルの中に桜が入っているのが、きれいだった。違う色を重ねている所が春の優しい感じを引き立てていると思う。形から春の思い出を語っているように感じた」

b. 「季節感に導かれた風情や五感の流露」の評価

「作品の華やかさがすごかった。春の桜の色によく似ていてかわいらしかった。ジェルが溶け残った雪のようなところと、小さな花が咲いていたところに『春の足音』を感じたから」

「『桜が舞う夜』という題名が上手く表現されていて良かったです。おだやかな風情でした。ジェルに色をつけて重ねているという発想が良かったです」

c. 「部分の組み合わせ方による妙味」の評価

「『もろこし』のような現実的な菓子のつくりと、隣のかんてんのような非現実的なものとの組み合わせが、とても美味しく見えた。もろこしのつくりの工夫にとっても個性が出ている」

「大福のように、もち、あん、粉の組み合わせが、本物の和菓子のように。表面のプルプル感に遊び心があって楽しい。一瞬ありふれた形に見えるけど、ゼリーとまぶした物の組み合わせが独自のアイデアに

なっている」

d. 「ハサミや爪楊枝などの道具を使った細かい手作業」の評価

「飾りつけが工夫されていて、食べてみたいと思った。それと細かいパーツの一つ一つに手がこんでいて、とてもきれいでした」

「雪の結晶など細かいところまで表現されていた」

e. 「演出としての盛りつけ・飾り付け」の評価

「和菓子の工夫はもちろん盛りつけの演出も工夫されていて、思わず手にとって食べたいような感じで、すごいと思いました。『春』が表れていて見えて飽きない作品でした」

「ただ作品を置くだけでなく、わざと和菓子を切って中身を見せたことで、食べたいような作品でした」

f. 「人柄の表現」の評価

「三つ添えている感じが良いと思うし、皿とも合っているので〇〇さんのさわやかなイメージがすごく出ていて、いいなあと思ったからです」

「落ち着いた感じで可愛かったし、〇〇らしく、美味しそうだったから。折り紙で作った花とか、可愛かったです」

g. 「ストーリー性」の評価

「細かい表情のつくりストーリー性があり、見ているととても楽しい。パッと見て『洋風かな?』と思うのが、『月とウサギ』で『和』の感じができている」

h. 「和菓子を構成する諸要素のバランス感として様式的効果」の評価

「色づかいのバランスが良く独自のまとまった感じを出していると思う。上に花を乗せているところが、かわいらしくておいしそうに見えた。中身を透かしている所が、春の新しい様子をかもし出しているように思えた」

i. 「商品名(題名)のユニークさ」の評価

「『広瀬川の春』という題名が気に入りました。きれいな色合いで、『川に落ちてきた花びら』のイメー

ジが伝わってきました。薄くプルプルしたジェルは川が太陽の光に当たって光っているようで良かったです」

評価内容における基本的なものは季節感、リアリティ感、地域性(仙台市)の三つである。しかしそれ以外にも新たに9項目も分節化されたことは、本題材実践で想定された以上の鑑賞及び評価能力が、奇しくも約3割の生徒によって発揮され、身に付けられた事態を意味している。

新・旧版美術科学学習指導要領第2及び3学年の目標に、「独創的・総合的な見方や考え方を培い」との文言がある。それは額面通りに受け取るならば理想度が極めて高く、絵画や彫刻、デザイン、工芸等の伝統的なジャンルで生徒によって掛け値無しに達成されたとの報告や、記録を筆者は寡聞にして知らない。かくてそれをこれまで荒唐無稽と感じ、日本で唯一公認された実践的方法論である学習指導要領として学校教育上、無責任な文言と見なしていた。

しかし教育目標としての法外な文言はダミー和菓子の制作と鑑賞活動で、にわかに信憑性を持ち始めたのである。「主題表現法に導かれた自分たちの作品」を質問紙法によって鑑賞及び評価するならば、当該能力が効果的に育成されるという、方法論的仮説の有効性を検証するための題材的意味、並びに当該能力育成のための教育的意義における本題材の特筆度が、この場面で客観的に測られるのである。

3. 回答内容の評定基準化法による主題表現力の測定

本章では、〈質問事項3〉「季節感のある『仙台の四季』商品開発デザインの学習を振り返って、学んだことや気づいたことを記述しなさい」に対する回答内容を対象として、評定基準化法を試みた。その結果、主として主題表現力、補足的には鑑賞及び評価能力の程度について、以下に述べる四つの類型が序列的に析出された。それは「(1)主題意識とその表現方法の関係を自覚し、併せて創造的な技法を提示した類型」「(2)主題意識とその表現方法の関係を自覚した類型」「(3)主題意識のみを抱いて表現した類型」「(4)主題意識が不在であった類型」である。

1) 「主題意識とその表現方法の関係を自覚し、併せて創造的な技法を提示した類型」

本類型の具体的な事例を三件ほど示してみたい。

「和菓子を作るにあたって、その菓子がどれだけ『和』というテーマに合うのか。そしてその和菓子の季節の色をどれだけおいしそうに再現できるのか。というところに心がけて取り組んできました。また、粘土を混ぜると、いろいろな色の変化があるだけでなく、マーブル模様になって不思議な美しさが出てくるようになりました。川の流れや、時の流れ、うず巻く葉や花の模様などに使うことができ、さらに味のある和菓子が生み出せるような模様でした。そのマーブルと季節感のある色を見て、美しく組み合わせることができたと思います」

「『仙台の四季』はちょっとした工夫によって、変化することが分かりました。また同じ季節でもジェルの中にとじこめたり、串にさしてみたり表現方法によってガラッとイメージが変わったりして、作ってとてもおもしろかったです。私は季節で迷ったりどんなものを作っているのか、かなり悩んだけど、シンプルで、でも季節を表現できた作品になりました。粘土を使っただけの授業で想像力と表現力がついたと思います」

「季節感をしっかり出せし、アイデアも他にはないものを生み出したので、観てて味のある和菓子をつくることができました。仙台の四季ということで、風や寒さをイメージしてつくったけどわかりにくくなってしまったことが残念に思う。少なそうで多い、多いそうで少ない材料でどう季節感やアイデアをつなげこむか苦戦したため、和菓子づくりがとても大変なことがわかった。この大変なことを成功させられるように、今度機会があれば本物をつくりたい」

この能力別類型に属する生徒は121名中の23名で全体の19%であった。創造的な技能が高揚（ワクワク）感を伴って、約2割を占める生徒によって発揮されたのである。再び記すことになるが、このことは本題材の教育的意義の高さを物語っているといえよう。

2) 「主題意識とその表現方法の関係を自覚した類型」

本類型の事例として次の二件を示してみたい。

「学んだことは、やっぱり人が食べたいと思う和菓

子を作ることは、相当大変だということでした。ビデオで見るとあんなにすぐ作り上げていくのに、私達がやってみると、デザインから、よく分からなくて大変でした。どうすれば季節の感じを出せるのか、なかなか分からなくて何度も何度もデザインを変えていきました。ジェルをやるのは楽しくて、面白くて『和菓子作りは楽しいなー』と何度も思いました」

「最初はどのようなものを作るか、全然イメージがつかなかったのですが、だんだんテーマをしぼっていったら、最終的には自分なりの『仙台の四季』を表現することができ、とても満足できる作品が出来上がったと思います。また、他の人の作品を見て、それぞれの作品が一つ一つ違って、みんな独特の表現方法や作り方で、『あの作り方、いいなー』と思うことがたくさんあり、このように『人から良いところを学ぶ』ということ学びました。私的には、どの作品も美味しそうだな、と思いました」

次の事例は主題表現力がすでに測定されたのち、鑑賞及び評価能力をも測られる箇所として特別に考察の対象とされた。その結果、主題表現力をめぐる評定基準の第2類型に属するもの、と判定されたものである。ただし質問設定の性格上、鑑賞及び評価能力が第1類型に収まることは原理的にあり得ないので、レベル的には最高位に位置していることを指摘しておきたい。

「……今回のことを通して和風の物について理解が深まり、和菓子の単純なデザインの中に作者の思いが込められていることが分かったような気がしました」

この能力別類型は71名で全体の58.7%に達する。いわば約6割の生徒が正真正銘の主題表現法を体得したのである。以上、第1と第2の類型を合わせれば94名、全体に対する比率にして77.7%約8割もの生徒が、主題表現法の構造と機能を実践的にも理論的にも自覚したことになる。それは本稿で提起する方法論的仮説の有効性が、本題材によって鮮やかに検証されたことでもある。

3) 「主題意識のみを抱いて表現した類型」

本類型の事例を三件、提示したい。

「私は最初、和菓子はどうすればいいのだろう？と思っていたのですが、季節が決まると、秋→紅葉→月見→うさぎと、アイデアがわいてきて、しぼるのが大

変でしたが、アイデアをしばらく、つくれたのですが、うさぎの目が難しくて、怖い…カワイくないうさぎになってしまいました。私のつくったまん月と、合っている感じでいいものになったと思います」

「アイデアはたくさんかびました。だけどそれ成形にすることができませんでした。いざとなり作ろうと思ってもどうすればいいか分からなくなったからです。けどうまく作ろうとか失敗できないという気持ちをなくし、季節だけを考え自由きままに作ったら案外それがいいものになりました。和菓子を作ることに必要なもの、それは季節感そして自由なアイデアだと分かりました。この和菓子作りの授業でたくさんの芸術の美しさ、偉大さが分かりました」

「『仙台の四季』の授業で一番学んだことは『仙台』を見ることです。今までずっと住んでいた仙台も、最初の授業で『仙台を連想するものは？』という課題を出されて分かったようで、何も頭に浮かばなくて、先生が持ってきてくれた資料を読んで、やっといくつか案が出てきたくらいでした。けれどもその分、新しく入ってきたアイデアから、どんどん発想を広げて、アイデアスケッチまで完成させることができました」

この能力別類型は13名で10.7%であった。約1割の生徒が主題表現法の入り口付近で低迷し、創造活動の喜びとともに達成感を味わえなかったことになる。

4) 「主題意識が不在であった類型」

本類型の事例として、次の二件を示したい。

「和菓子を作ってみて、作るのがとても大変だったけれど、上手く作れたのでよかったです。作るのとはとても大変だけれど、みんな自分なりに工夫していたので、すごいと思いました。あと、自分の作品を見てとてもシンプルなので、もっと工夫したほうがよかったのかなと思いました」

「和菓子を実際に作ってみて、気づいたことは、作るのはむずかしいことです。でも職人さんの作品を見て、どのようにすればいいのか、思い付きました。それから作品を変えて、他のものを作ったりしました。とってもいいとはいえないけど、自分の中ではけっこういい作品ができたと思います。みんなの作品を見るとぼくよりうまそうな作品がたくさんあって、とってもよかったです。これから和菓子、または菓子、洋菓子を食べるときは、感謝しながら食べたいと思いま

す」

この能力別類型は14名で全体の11.6%である。約1割の生徒が主題表現法のレベルに到達できず、それを全く行えなかったことになる。第3の類型より第4の類型の方が、1名多い結果が出たことはやや衝撃的である。だが、第1と第2の類型に属する生徒が全体の8割に上ったことを勘案するならば、本題材に対する評価は相当に高いことが確認されよう。内容的に変更すべき箇所は見当たらないのである。だから、主題表現法を成就できない生徒が1割認められた事態は、もとより本題材の善し悪しに起因するものではないだろう。それはこれまで小学校で受けてきた図画工作科教育の、好ましくない局面の影響によるものと思われる。

4. 主題表現法の教育的意義と「造形遊び」の攪乱的介入

次の文章は、評定基準の第1及び第2類型に到達した生徒全員が、主題表現活動の醍醐味を深く実感した、と窺われる事例である。

「自分の気持ち（季節感）を別のものに表現するということは、心を豊かにするととても楽しいことだと、今回の学習を通して思いました」

「今回の授業で自分の考えを作品に込めるのは難しいけど、それが届くと嬉しいということが分かりました」

「これからも美術をする時には、気持ちを込めて、何か伝えたいことを表現できるように、がんばっていきたいです」

「私の心にある和菓子に表したいことが指先を通じて流れ出てくるようで上手くできてよかったです」

これらの感想は本題材で熟中し高揚（ワクワク）感を伴いつつ、主題表現法の意義と働きを自覚した例である。小学校でも新旧学習指導要領の趣旨に沿おうとする限り、主題表現法は絵や立体、工作の各種題材で実際に体験されなければならないはずである。しかし規則的には、小学校図画工作科「A 表現」のカリキュラム全体の少なくとも五分の一を、「造形遊び」が占めることになっている。けれどその実践が主題表現法のあり方を常にぼやかし、小学校児童の内側で正常に抱けるはずの表現意識を攪乱させているのではなからうか。一部の生徒にあって、中学1年になっても主題

表現力がなかなか身に付かない現実を示し、制度的に行われてきた美術教育の成果にとってゆゆしき事態となっている。

「造形遊び」は材料（場所）や、並べる・つなぐ・積むなどの操作から、外在的・即物的に発想する造形活動を一方の柱に立て、意味や概念が住まう脳内イメージではなく、物質表現をめぐる五感及び身体感覚レベルでの非人格的な造形操作を基軸とする。ここで脳内イメージとは目を閉じても脳裏に残る、内在的イメージの謂いである。それと好対照をなすのが「造形遊び」で働くはずの、造形行為に伴う失語的イメージである。これは眼をあけた状態にある、外在的な想像作用の産物なのである。

したがって「造形遊び」は現実や人間に対する認識と感情を深めていって、それが造形表現にもたらされる類の美術ではない。一般に芸術は技術を基にして自己と世界の関わりを、象徴的に表現する営みと見なされている。主題表現法はもとよりこの範疇にあり、これまでもこれからも教育効果が保証されているのである。

それにしても主題表現法は、小学校図画工作科から中学校美術科へと着実に受け継がれていくことが、小学校及び中学校平成20年度版学習指導要領を繙くことで確認される。それに抗するように、「造形遊び」は表現のための時間の少なくとも五分の一を費やして、小学校で実施されてきたのである。この種の活動は非人格的であることが特徴と見なされるが、それは自己意識性の高くなる中学生レベルにおける美術教科で、果たしてどのように扱われているのだろうか。その事情を調べてみても、両者連携の痕跡を中学校美術科学習指導要領の中に、いささかも認めることができない。

「造形遊び」が小学校段階の6年間に限って児童に線香花火のように供されているとしたら、それは普遍性を持ち得ない思い付き的な教育内容だと評価されざるをえない。それが学校で制度的に実践されていること事態、教育目的及び実践上多くの問題をはらんでいるのではなかろうか。

5. 作品の得票数と上位得票者の鑑賞及び評価能力の調査

生徒作品の得票状況について見れば、15票1作品、14票3作品、13票1作品、12票2作品、9票2作品、8票2作品、7票5作品、6票5作品、5票7作品、4票7作品、3票14作品、2票22作品、1票39作品であった。121名の生徒が一人3点の作品を選出した場合（363件）よりも票数が多いのは、一人で3点以上も選ぶような意欲的態度を示す生徒がいたためである。

高得票を得た作品が概して少なく、低得票の作品が多い中で、10人以上の票が入った作品は7点を数えるのみに留まった。そうした状況にあって、7点は全作品の中で集中的に高い評価を得たことになり、作者が有する造形表現力の高さがそれによって客観的に裏付けられよう。和菓子を制作した上位7名の生徒によって個別的に記された鑑賞カードについて、評価内容の項目別化法と回答内容の評定基準化法による分析の結果を、それぞれ確かめてみた。

その結果、予想された範囲を超えて項目別化を行えた者は7名中4名で、件数的には17件にも上った。なお評定基準の第1類型は7名中5名、第2類型は7名中2名であり、もとより第3及び4類型に収まる者は皆無であった。既述の通り、第1及び2の類型は主題表現法をマスターした者で、第3及び4の類型はそれを自分のものとすることができなかった生徒である。

この事実から本題材にあって、主題表現力と鑑賞及び評価能力の間には、強度の有意性の認められることが分かる。その点からも今回、本稿が具体的な形として研究対象とする、題材論的仮説の有効性が確かめられるのである。それは「主題表現法に導かれた自分たちの作品」を質問紙法によって鑑賞及び評価するならば、当該能力が効果的に育成されるという仮説に他ならない。

かてて加えて以下の事柄が判明する。それは本方法論にとって、和菓子の制作と鑑賞活動がその有効性を検証することにおける題材的な意義が、特筆すべきレベルに達するほど高かったことである。

まとめ

第一に評価内容の項目別化法で、主に鑑賞及び評価能力のレベルが分析されたが、能力別類型の特質と人数分布について以下のような結果が得られた。分類されたのは、

1)「予想された範囲内で評価内容の項目別化がなされた類型」、2)「評価内容の項目別化がなされなかったか、不首尾に終わった類型」、3)「予想された範囲を超えて評価内容の項目別化がなされた類型」の三つである。それぞれの所属者数について見れば、1)は121名中72名で59.5%、2)は14名で11.6%、3)は35名で28.9%であり、簡潔に言えば人数分布はそれぞれ6割、1割、3割であった。

第二に、回答内容の評定基準化法によって主として主題表現力のレベルが分析されたが、能力別類型の特質と人数分布に関しては、次のような結果が出た。分類されたのは、1)「主題意識とその表現方法の関係を自覚し、併せて創造的な技法を提示した類型」、2)「主題意識とその表現方法の関係を自覚した類型」、3)「主題意識のみを抱いて表現した類型」、4)「主題意識が不在であった類型」の四つである。その所属者数を調べると、1)は23名で19%、2)は71名で58.7%、3)は13名で10.7%、4)は14名で11.6%であり、簡潔に言えば人数分布は各々2割、6割、1割、1割であった。

評価内容の項目別化法で析出された類型のうち、生徒の鑑賞及び評価能力を育成する上で指導的配慮がとくに必要とされるのは、第2類型に所属する1割の生徒である。彼らは主題を作品から感受できなかったのであり、中学1年生という発達段階に照らし合わせてみても、作品の意味や心情を感じ取る能力としての感性の働きの不十分である、と言わなければならない。それは鑑賞の営みを基礎づけている、人間に特有の能力なのである。

既述のように、主題形成とはダミー和菓子をめぐる季節感やリアリティ感、地域性（仙台市）の主題意識が作品に直観として与えられたものであり、表したいことの造形表現化は、本授業の課題として生徒全員に共通に与えられたはずである。もとより感性は国や民族の違いに関わりなく、人間である限り小学校高学年で生来的に身に付くものとされている³⁾。かくて能力上の不十分さには、何らかの人為的な疎外がここに働いているに違いない。

回答内容の評定基準化法で析出された能力別類型のうち、主題表現力を指導する上で配慮が必要とされるのは、第3類型の1割と第4類型の1割、合計2割の生徒である。彼らには主題表現法が身につけていない

のである。

鑑賞能力としての感性と、主題表現力の面で努力を要する者がいる。このように判定された生徒の数値が先の研究方法でそれぞれ明らかにされたが、両能力の人数分布には二倍もの差がここに認められた。その理由としては鑑賞能力よりも、主題表現力の方が難易度の高いことが考えられる。

後者は手を働かせながら、主題意識を形と色で試行錯誤的に直観化していく能力であるのに対して、前者は作品に直観として与えられた主題形成を、感性的に理解していく能力なのである。その点で後者は前者よりも、一定量の時間を費やしながら手を働かせて、表現方法の構想を練り、その内容を作品として現実化していく活動が介入する。その分、営みの仕組みが複雑になるとともに、仕事量も多くなるのである。

それと同時に彼らが小学校で受けてきた、美術歴にも関わるものと思われる。それは、図画工作科の教育内容を一方で形づくっている「造形遊び」が、他方における主題を感じ取る能力としての感性と、主題表現法のあり方を常に攪乱しているのではあるまいか。

それにしても作品に自らの気持ちや考え、心など自分のあり方が写し出され、それをじっと見つめて新たな自己として統合されるような造形活動で、自己刷新や現状批判に類する体験がなされた喜びを、次の質問に対する回答の中で、多くの生徒が実感として記すのを見た。それは<質問事項3>「季節感のある『仙台の四季』商品開発デザインの学習を振り返って、学んだことや気づいたことを記述しなさい」である。それにも拘わらず、2割の生徒によって主題表現活動の醍醐味が味わわれていないのは、誠に不幸と言わざるをえない。

註

- 1) 石崎和宏・王文純『美術鑑賞学習における発達とレポートに関する研究』 風間書房 2006年 164頁。
- 2) 同書 166頁
- 3) 同書 97頁

(平成21年9月30日受理)



図版1 生徒作品



図版2 椿



図版3 笹の葉



図版4 青葉の花



図版5 仙台七夕